

II プロローグ II

武蔵野台地の先端部に位置する「志木市」は小ぢんまりとした市^{まち}である。その面積は、全国的に見て最下位に近い（下から七番目）。川^川のまち^{まち}と呼ばれる志木市は、狭山丘陵を水源とする柳瀬川が北側を流れ、川越を発した新河岸川と志木市役所付近で合流する。さらに南下して都内に入ると、名称は「隅田川」となる。一方、志木市の東側は、荒川の水路を境界として、「さいたま市」に接している。

* * *

六千年の古^{いにしへ}えに遡^{さかのぼ}って、発掘された遺跡から推理すると、市内の各所に、少なからざるヒト（縄文人）が居住していた。考古学上、縄文時代と呼ばれ、海面が上昇して、現・東京湾は北方に「奥東京湾」を形成した。なお、縄文とは、このころ出現した土器に縄目の模様が刻印されていたことに由来する。

さらに、西暦紀元の前後にわたって「弥生時代」（弥生式土器に由来する）となり、紀元後となつてほぼ二千年、古墳の時代から、奈良時代、平安時代、さらに鎌倉時代から中世・近世（江戸時代から明治維新に至る）を経て今日まで、人々の街づくりは途切れずに進められた。このような発展的な展開は、それぞれの時代の遺構や遺物が市内の各所から発掘されていることから確かめられ、疑いの無いところである。そして現代に至り、首都東京に近接するため、ベットタウンとして人気が高くなる。大型の集合住宅が続々と建設され、合わせて医療・福祉施設のプロジェク^トも急増し、転入する新規の市民は一途に増加しつづけている。

* * *

地域の歴史を紐解いて古きを知り、新規の市民が、そして旧市民も、かつての繁栄の記憶を甦^{よみがえ}らせ、これを糧として、新たな活力の創出に結びつくことを目標として「小さな街の記憶」を語ることにしたい。公刊の『志木市史』ほか、多くの郷土資料がすでに知られているので、屋上に屋を架すのでは、との誇りは免れない。しかし、川^川郷土史^{郷土史}という、古いイベントのみを扱うことが通例で、近年の、そして現代の記述に及ぶことは無かった。対する本稿では、明治・大正・昭和から平成へと、大きな変革と進展が見られた近年のイベントをも語ることにしたい。

また、これまでの郷土史では、しばしば、口伝え、所謂「伝承」「伝説」が強調され、虚構、フィクションも登場し、それらは歴史に彩りを添えはしたが、その行き過ぎが批判される事例も少なくなかった。一方、本稿では、確かな証拠や記録、絵図などを基底として、真実のストーリーに迫ることを心掛けた。

一、遺跡が教える古代の暮しは・・・

Ⅱ 石器時代を経てⅡ 縄文時代へ

一・一 「旧石器時代」には・・・

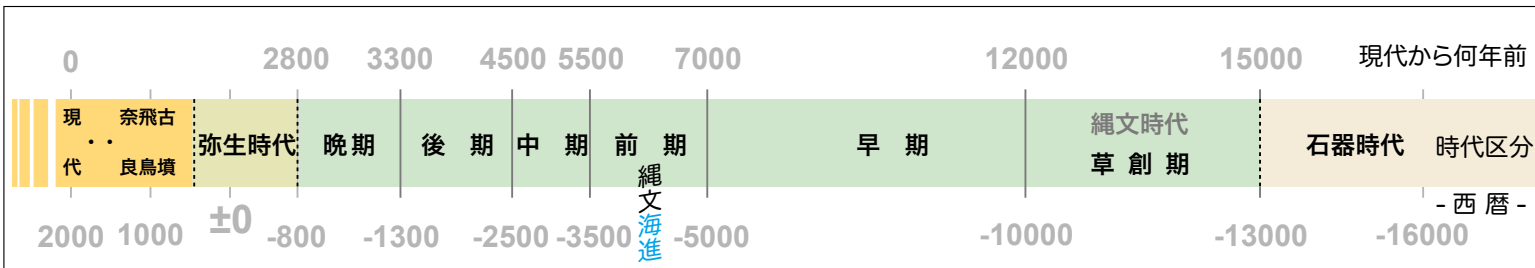
近年、志木市内の各所で、精力的な調査が行われ、多くの貴重な遺跡が発掘された。そのうち最古のものは、現代を遡ること凡そ三万年前のもので、考古学では「旧石器時代」といわれる。著しく寒冷だった時

代で、海面は今日より百米も低かった。それから二万五千年位い前まで、志木市の東部（現・宗岡一帯）は、川の流れて谷が刻まれ、河原には石が敷き詰められていた。そこから遙かな西方を見上げると、ローム層（火山灰が風化・堆積して赤い粘性の土）の台地が広がり、野獣を見付け、狩猟によつて暮す人たちが生活する場となっていた。

一・二 縄文土器の時代へ

最寒冷期を記録した、一万九千年前から地球規模で温暖化に向かう。環境の変化が短期間のうちに起こり、人々は定住することを始めて、食料を煮たり貯蔵するための土器が出現した。それらには共通して縄文（縄目の文様）が見られたので、「縄文土器」と呼ばれ、石器時代に続く時代区分として、「縄文時代」の名称が定着した。

海面が上昇して海水が侵入し、現在の東京湾は北に「奥東京湾」を形成し、さらに北上して東西に二分され、紀元前六千年ころになると、西側の入江は川越近くまで入り込む。「縄文海進」と呼ばれ、海面は三メートルくらい上昇して、現・柳瀬川の流域は「古入間湾」と呼ばれる



水域と化した。市内東方の宗岡地区は海面下に沈み、志木地区との境界は海岸となる。

気温は今よりも一、二度高く、温暖な気候のため、湧き水や海産物が豊かな丘陵の崖線には人々が好んで集まって居住した。志木市内の発掘調査によって、縄文時代の住居が数多く発掘され、遺跡からは、多種多様な縄文人の遺物が出土している。特に、この時代の人々が食べたあと捨てた貝殻などが、「貝塚」として残され、重要な遺跡となっている。

一・三 「縄文海進」と貝塚

志木市には、現・志木中学校沿いの道路際（柏町四丁目）の斜面に「城山貝塚」（「城山」とはこの辺り二帯の字の名前）が所在している。周辺で縄文前期後葉の住居跡が発掘されたので、前期中葉（約六千年前）のものとして推定されている。この貝塚は、何時でも目前にすることができる、志木市内最古のモニュメントとして極めて貴重である。

発掘調査が行われ、縄文人の遺物として、ヤマトシジミ・マガキ・ハマグリなど、合わせて十二種類の貝類が確認された。平成二年に立てられた志木市の史跡案内板によれば、淡水系の貝を主体とする縄文海進の最盛期に形成されたものと推定されている。市内には、その他にも、



平成二年に標識柱が立てられた 城山貝塚

幾つかの貝塚が確認されたが、農地として耕作され、或いは発掘・調査後に埋められて、地表には残されなかった。

一・四 城山の対岸に「水子貝塚」が所在する・・・

志木市の城山貝塚は規模が小さいが、その北には、もつと規模の大きな貝塚、「水子貝塚」が所在する。縄文時代には、海進によって、現在の柳瀬川に沿って入江が形成されていたので、「水子貝塚」の位置は、丁度、城山の北に当る対岸となる（「水子貝塚」と「城山貝塚」との関係図は8ページを参照）。

規模の大きな「水子貝塚」は、縄文時代前期（5,500～6,000年前）の代表的な貝塚として、昭和四十四年、国の史跡に指定される。

貝塚と古えのムラを保存するために整備され、約四万平方メートル、周囲に全長約六百メートルの園路をもつ史跡として、「水子貝塚公園」がつけられた。公園内には「竪穴住居」が復元され、そのうちの一本には、当時の居住生活の様子が再現された。また、「水子貝塚公園資料館」が開館して、埋蔵されてい



復元された竪穴住居とその内部

た資料の多くが収納、展示されている。

「奥東京湾」と「貝塚」の分布

9頁に示す図には、北上した「奥東京湾」がさらに「古入間湾」を形成する地形と、沿岸に残された「貝塚」の位置が記入されている。

なお、国内で発見された「貝塚」は二千五百個余りだが、ほぼ半分が関東地方に、しかも全体の四分の一近くは、東京湾の東沿岸、特に千葉の海沿いに集中している。

大正時代に始まった、海岸線の変化についての研究（鳥居龍藏、大正十年＝1921）を基盤として、東木龍七は、「地形と貝塚分布から見た関東低地の旧海岸線」を地図上に示した（9頁の絵図、「奥東京湾と貝塚の分布」を参照）。

海面が上昇し、当時の東京湾は、北方に向けて侵入したので、「奥東京湾」が形成された。さらに海面は二分され、西側は「川越」まで北上し、また東側は台地上の「浦

和」を除けて、野田、流山に向かった（参考資料：法政大学地球研究会のブログ）。

一・五 貝塚の発見と縄文時代の土器

良く知られているように、明治十年（1877）、アメリカの生物学者モース（Edward Sylvester Morse）が横浜から新橋に向かう汽車の中から貝塚を見付けた。この「大森貝塚」から出土した土器を、彼は報告書の中で「Cord Marked Pottery」と呼んだ。その訳語が索紋、縄紋などを経てようやく「縄文」に落ち着いたのである。縄文土器の発見の糸口となった大森貝塚は、JR京浜東北線・大森駅近くにあって、遺跡庭園として整備され、線路脇には記念の碑が建っている。

縄文土器は北海道を除く日本各地で出土しているが、もっとも古いものは、AMS法（極微量の天然レベルの放射性炭素の14を高感度で計測する技術）で測定した値を暦年代



現在の柳瀬川は縄文海進のころは古入間湾と呼ぶ
古入間湾の対岸に所在していた「水子貝塚」と「城山貝塚」との対応を示す



水子貝塚公園の全景

縄を回転させて縄文をつける場合とがあり、多様になる。

縄文時代「早期」になると、輪型にした粘土を積み上げて成型する手法が取り入れられ、そのとき表面に縄を当てる転がすと、輪と輪の繋ぎ目が塞がれるため、ごく自然に縄の文様が付く。これが「縄文」土器の名称の由来である。

縄文人はその後、意図的に装飾を施す。始めは細い棒のようなもので幾何学的な文様を描いていたが、中期になると、粘土を貼り付け立体感を生む技法が広がって、創意に富んだ文様が次々に取り入れられた。

その極め付きは、「火焰土器」（通称名）であろう。縄文時代「中期」を代表する土器の一

種で、燃え上がる炎を象ったかのような形状の土器を指し、特に装飾性が豊かな土器である。

一七 「火焰土器」の発見は・・・

新潟県の南部、十日町市の信濃川右岸段丘上に位置する笹山遺跡から、1980年～1986年にかけて実施された調査によって出土した、指定番号一番の火焰土器（火焰型土器とも）には「縄文雪炎^{ゆきほむら}」との愛称が付けられ、国宝に指定された。

現代美術のバイオニア、岡本太郎は、昭和二十五年（1951）、偶然立ち寄った国立博物館で、「火焰土器」を目にする。そして衝撃を受け、

絶賛したのであった。「現代人の神経にとってはまったく怪奇だが、この圧倒的な凄みは日本人の祖先が誇った美意識だ」。翌年太郎は縄文土器論を発表、当時考古学の一資料に過ぎなかった縄文土器に、高い芸術性があることを世に知らしめた。



武蔵野台地の鳥瞰図（CG）

志木市の上空から西方向を望む

一・八 多様な縄文土器

粗製深鉢形、精製深鉢形、浅鉢形、有孔罌付土器、注口土器、火焰土器などが知られる。口が広くて深い形のものも多く、これを「深鉢形」といい、約二万年にわたる縄文時代を通して、基本形であった。スープやシチューのように、蒸発はせず、食物をじっくり煮るのに都合が良かったためとされ、出土した土器の表面が赤く変色し、煤がついたものも多い。



縄文雪炎



「縄文土器論」

美術雑誌『みづえ』

1952年刊

縄文土器を理解するために・・・

長年月の間に土器の形は変化したが、その流れを系統的に整理しようという努力が積み重ねられて来た。遺跡から出土した土器の「形態」とともに注目されたのは「文様もんよう」である。

考古学では、「標準遺跡」（基準遺跡、「標識遺跡」とも）から発掘された土器を「標準土器」

（又は基準土器）として年代を比定する、というプロセスが提案された。「標準遺跡」は、遺構、遺物が特定の型式、形式、様式、あるいは、年代、文化期をもつと認められた遺跡だが、縄文遺跡は関東地方に密集しているので、大部分の「標準遺跡」は現・東京都周辺から選ばれている。「標準土器」という指標で区分された縄文時代の区分は、草創期・早期・前期・中期・後期・晩期という六つである。また、

「土器編年」とは？

一方、文字も無かった時代なので、土器が制作された実年代・絶対年代は分らない。そこで、「土器編年」という概念で年代を論議することになった。

この土器の年代は、それより古い、いや新しい、という相対的で、しかも曖昧な推定である。しかし、編年という概念によつて、時間の物差しができ、例えば、同じ時期に、同じ型式の土器が分布する地域と、別の型式が広がる地域の時代区分の論議などは容易になる。

また、土器の地域差は方言に例えられる。違っていたり、似ていたり、縄文土器にも地域による違いや類似性が見られる。そして地域性と、変化の流れの系統を合わせて調べることによつて、土器の型式の動きと、その背景となる人の動きとを知る手掛かりが得られるという。

一・九 縄文人の動向を探る

志木市内では、中野・城山・中道・新邸・西原大塚・田子山・市場裏遺跡から出土した土器などによって縄文時代の区分が比定され、それぞれの遺跡で活動した人の動きを推測する努力が続けられた。

土器の展開を「編年」で辿る

志木市当局の遺跡の発掘・調査はすでに半世紀にも及ぶ。次頁に掲出した「縄文土器編年表」によって、その成果を考察することしよう。この表の「土器の形式」では、特に土器の「文様」に注目したい。

◇約13,000～10,000年前の草創期は、日本列島が大陸からは離れる直前だったと推測されている。気候は短期間に寒暖が起り、環境の変化は厳しかったようだ。しかし、やがて温暖化が進み、氷河が溶けて海水面上昇して、海が陸地に侵入する。「海進」といわれる。

貝類や魚類が新しい食料となったが、狩猟の獲物は、象や野牛などの大型哺乳動物から中・小の哺乳動物、鹿や猪などに変わっていった。

「縄文草創期」の志木市内では・・・

平成四年（1992）に発掘調査された「城山遺跡」から、爪形文系土器一点が出土し、同六

志木市内の主な縄文土器編年表

出土した遺跡	土器の形式	区分
	(出現期土器郡)	13000
	(隆起線文系)	草創期
	爪形文系	11000
	多縄文系	10000
	擦糸文系	10000
	夏稲 荷 島 稲 荷 台 花 輪 原	10000
	貝殻・沈線文系	9000
	田戸下層	早
	条痕文系	8000
	野 島 島 鶴 ケ 山 茅 打 越 下 吉 井	7000
	羽状縄文系	6000
	花 積 下 層 関 黒 山 浜	前
	諸 磯 浮島・興津	5000
	十三 菩 提	5000
	五 領 ケ 台	中
	勝坂 阿玉台	4000
	曾利 連弧文 加曾利 E	4000
	称名寺	後
	堀之内	4000
	加曾利 B	3000
	安行 1・2	3000
	安行 3	晩
	千網	期
		2300
		弥生時代



年の発掘では、多縄文系土器三点、爪形文系土器一点が発見された。また、平成十年（1998）には、「田子山遺跡」で有茎尖頭器一点が出土した。

「有茎尖頭器」は、有舌尖頭器ともいい、先端を鋭く尖らせた槍先形の打製石器で、基部に茎（みかじ）刀身の柄の部分（こ）をもつ。

「爪形文系土器」は、土器の表面に貼付けた粘土の紐に爪または爪形様のものを押し当てて模様としたものである。「多縄文系土器」は、縄を器面に押し付けて縄文を作る場合と縄を回転させて作る場合とがあり、縄の大小、右捻り、左捻りなどの文様の区別があつて、多様である。草創期の終わるころ、土器の表面に隈無く文様を施すようになって登場した。

◇つづく縄文早期は、約10,000～6,000年前で、日本列島は大陸から全く離れて島国となる。ドングリやクルミなどの堅果実を、栽培する農法によって食料資源となった。狩猟用の弓矢も普及し、また漁労が活発化して貝塚が出現する。

「縄文早期」に志木市内で検出された遺構は・・・

「早期」の土器とされる「撚糸文系」として、夏島式と判断される土器が「新邸遺跡」で発見され（志木市史通史編）、そのあと、恐らく数百年以上の後の時代のものであろうか、「沈線文系」の土器として、田戸下層式に比定されたものの断片が「新邸遺跡」で出土した。ま

た、「新邸・中道・中野・城山遺跡」からは、早期後半の条痕文系土器（主に茅山式（かやま））の断片が出土した。市内の縄文人の活動はこの頃、活発だったのでは、と推測されている。早期末葉になると、志木市域低地部への海水侵入が激しくなり、陸上と内海の双方で食料の獲得が始まり、人口が増加して、定住化へと向かっていたようだ（志木市史通史編）。

平成十八年（2007）の「中道遺跡」の調査で、早期末葉（条痕文系土器の時代）の住居跡一軒が、また、「田子山遺跡」では、早期の撚糸文・沈線文・条痕文系土器が出土した。その後の発掘で、「富士前」・「新邸」・「城山遺跡」から撚糸文系土器が数点出土し、「中野・田子山遺跡」では、炉穴に伴って条痕文系土器が出土した。

縄文早期の土器の形式

「撚糸文系」は、撚り紐を丸棒の軸に巻いた原体（絡条体（ろくじょうたい））を回転してつけたもの。原体を回転しないで、そのまま土器面に押圧した文様は絡条体圧痕文と呼ばれる。

「撚糸文系土器」の標識遺跡の一つ、夏島貝塚は、神奈川県横須賀市夏島町に所在する縄文時代早期・初期の最古級の貝塚で、下層から出土した土器の一群には、「夏島式」の名称が付けられ、「標式遺跡」となった。

また標識遺跡の稲荷台遺跡は板橋区稲荷台にある縄文早期の、そして稲荷原遺跡は、さいたま市見沼区春岡に所在する遺跡、また花輪台貝塚は、北相馬郡利根町にある縄文早期の遺跡として知られている。

「沈線文系土器」の沈線文とは、木、竹、貝などを引きずって、直線や曲線を描くもので、押捺するときもある。沈線文系・「田戸下層式」土器の模様は、しの竹を半截してその割れ目で沈線を付けるものだが、「条痕文系」では、貝などの腹縁で土器の表面に条を付ける。

田戸遺跡は早期の田戸下層・上層式土器の標識遺跡で、神奈川県横須賀市田戸台に所在する。「田戸下層式」土器はユニークな形の尖底をもち、また、丸底で口縁に小さな突起のあるものもある。

「条痕文系土器」は、縄文人が早期・終末のころにもたらした土器で、志木市内の各遺跡で発見されるのは、「茅山式」土器が主流を占めている。神奈川県横須賀市に在る「茅山貝塚」を標識遺跡とする基準土器で、多量の繊維を胎土（土器本体をつくる原料、粘土や砂など）に含む「繊維土器」として知られる。

このころ（早期末葉）志木市内の縄文人の住み心地は良くなったようだが、丁度、市内の低地に海水の侵入が激しくなり、内海での食料の獲得が始まったからではないか、と推測されている。

条痕文系土器の分布は、柳瀬川右岸の台地全域に亘っていて、形式も揃っているが、住居跡・土坑などの遺構は発見されていない。そこで、定住するまでには到ってはなかったのではなからうか。

◇約6,000～5,000年前の縄文前期には、気候の温暖化は進み、海面は4～5メートル高くなる。既述したように（二頁）、「奥東京湾」が形成され、つづいて柳瀬川に「奥入間湾」が侵入する。内陸部に貝塚がつけられ、土器の数量は一気に増加して、平底土器が一般化する。

縄文「前期」に入って・・・
市内で発掘されるのは、「羽状縄文系土器」で、この系統の土器は、早期終葉の繊維を含む茅山式土器の延長線上に位置付けられている。

羽状縄文をつくるには、右捻り（ㄩ捻り⇨右ネジ）の捻り紐を縦において、横方向に転がすと左上がり右下がり、縄目が平行に並び、左捻り（ㄨ捻り⇨左ネジ）の捻り紐を同時に、縦において横方向に転がすと右上がり左下がり、縄目が平行に並び、これを同時に施文したり、順番に分けて鳥の羽のように縄文を器面に施文する技法、施文された状態が羽状縄文系土器の特徴である。

この土器群には、花積下層式、関山式、黒浜式が知られているが、何れも、土器をつくる胎土に植物繊維を混入させた「繊維土器」である。

「花積下層式」は、埼玉県春日部市の花積貝塚を、また、「関山式」「黒浜式」は、同蓮田市の関山貝塚、黒浜貝塚を標識遺跡とする土器群で、市内の「新邸遺跡」では、羽状縄文系の花積下層式土器が発見され、城山、中野、中道でも、条痕文系土器と重なって出土している。

「新邸遺跡」で見えられた黒浜式の竪穴住居跡は、志木市内では最古のもので、縄文人の定住化が始まったのでは、と考えられている。住居跡には貝殻などが堆積しており、住居跡内貝塚として貴重な遺構であることが判明した。

また、「城山遺跡」では、関山式、黒浜式土器が発見されている。この遺跡の北側台地の端に「斜面貝塚」として残された「城山貝塚」については、すでに本紙の5頁に記述されているが、その付近から縄文前期後半の関山式ないし諸磯式土器が出土しているので、これらの時代にかけて形成されたと推測されている。

平成期になつてからの調査でも、「西原大塚」・「新邸」遺跡から、また「城山遺跡」では諸磯式期の住居跡が検出された。「新邸」遺跡は貝層をもつ住宅跡である。

「諸磯式期土器」は、神奈川県三浦市・諸磯貝塚に由来し、その文様は竹管の半截・多截施文具によって付けられ、繊維は含まれていない。

◇約5,000～4,000年前は縄文中期に区分される。海岸線は後退して現在のそれに近くなり、縄文人の集落の規模は大きくなる。また、ドングリより食べ易い栗に変わる。

志木市内では、前期末から中期初頭にかけての数百年間の住居跡や集落の遺跡が確認されていない。そこで、繊維土器の時代に繁栄した縄文人の活動が衰退して定住することはなく、空閑地だったのでは、との推測もなされている。そのころ、志木市域は住み難い地域になっていた、ということになる。食料を求めて、容易に移動できるキャンプを設けていたか、と考えられる向きもある。但し、縄文時代・中期半ばからの遺跡の発見は、市内で著しく増加する。

特に、中期中葉から後葉にかけて、勝坂式く加曾利E式期の遺跡にその傾向が強くなって、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で、多数の住居跡や土坑（人力で土を掘った穴で、性格が不明なもの）が検出された。

「西原大塚遺跡」では、平成二十四年一月までの調査で、百七十軒余りの住居跡が環状に配置していることが判明している。しかし乍ら、中期末葉からは遺跡の検出は激減する。現在のところ、西原大塚遺跡から敷石をもつ住居跡が一軒確認されたのみである。

縄文中期の土器の形式として

「五領ヶ台土器」が知られている。神奈川県平塚市に在る「五領ヶ台貝塚」で出土した土器であるが、既に述べたように、この時期、志木市域の縄文人は移動していたらしく、居住跡の分布は乏しい。

中期後葉となると、遺構の発掘は増加し、「勝坂式」、「阿玉台式」、「加曾利Ⅱ式」土器の分布が増大する。「勝坂式」は神奈川県相模原市の勝坂遺跡に、また、「阿玉台式」は千葉県香取市の阿玉台貝塚に、そして、「加曾利式」は千葉県若葉区に加曾利貝塚から出土した土器で、Ⅱ式土器はⅡ地点から、また後期のⅢ式土器は同じくⅡ地点から出土したものをいう。

「勝坂式・阿玉台式」の土器は、縄文文様が少ないが、口縁部に突起を作ったり、表面に太い粘土の紐を貼付けて装飾し、全体を豪壮、雄大な造形で表現すること、動物、人物などの顔面把手や蛇を模した把手などが付けられるなどの特徴がある。また、「阿玉台式」は、雲母などを含み、器面に輝きがあり、「加曾利Ⅱ式」土器は、縄文と無文部分が区分され、単純化されている。

すでに本誌の12頁に紹介した、北陸地方で顕著な「火焰土器」もこの時期に相当し、縄文土器の装飾性の極致をゆくものである。

◇縄文時代後期は約4,000～3,000年前で、西原大塚遺跡から「堀之内Ⅰ式期」の住居跡一軒と「加曾利Ⅱ式期」の住居跡一軒、遺物集中地点一ヶ所が検出されている。また、その他の遺構としては、平成六年（1994）に発掘調査が実施された田子山遺跡第311地点で検出された土坑Ⅱ基があげられる。下層から「称名寺Ⅰ式期」の土器、上層からⅡ式の特徴をもつ土器が出土している。西原大塚遺跡第514地点でもⅡ基の土坑が検出されている。

「堀之内Ⅰ式土器」は、千葉市の堀之内貝塚から、また「称名寺Ⅰ式土器」は、横浜市金沢区の称名寺貝塚に由来する。

◇晩期は約3,000～2,300年前で、気温は二度前後低下し、海面も低下して漁労活動は壊滅的な打撃を受ける。

晩期では、中野・田子山遺跡から安行3C式・千網式の土器片が少量発見されるにとどまり、以降市内では弥生時代後期まで空白の時代となる。

◇日本列島の総人口は・・・

縄文時代には、人口は東国から北国に向かって、西国より多く、関東地方で活動していた縄文人の人口密度は、相対的には大きかったといわれている。

鬼頭宏著「人口から読む日本の歴史」（講談社学術文庫）によれば、縄文早期（～八千年前後）

にはほぼ二万人だったが、同中期の最盛期になると、二十六万人まで増加したという。原始時代としては高度な狩猟採集をもつて暮し、限りのある空間を最大限に利用していたと考えられ、住居跡などから割り出すと、日本の人口密度は、狩猟採集で暮す社会としては、世界で一番高かったといわれる。

しかし、のち反転して後期に入ると、人口は一気に減少し、十六万人にまで落ち込んでしまう。さらに、晩期には七万六千にまで減少した、という。住居の数、気候、その他の動静を調べ、人口の動態を推定することは至難の技であるが、以上のデータは、今日広く受け入れられている。

志木市域では・・・

縄文中期に始まった寒冷期が、後期から晩期に掛けてさらに進行する。縄文時代の後期、晩期の遺跡は激減して、人の居住は無く、通過する縄文人もいなかったのでは、と推測されている。

但し、この頃九州北部や近畿地方では、水稻の農耕を中心とする生産社会が形成されつつ、弥生時代へと移行していた。その流れは東国に向かっていたのである。

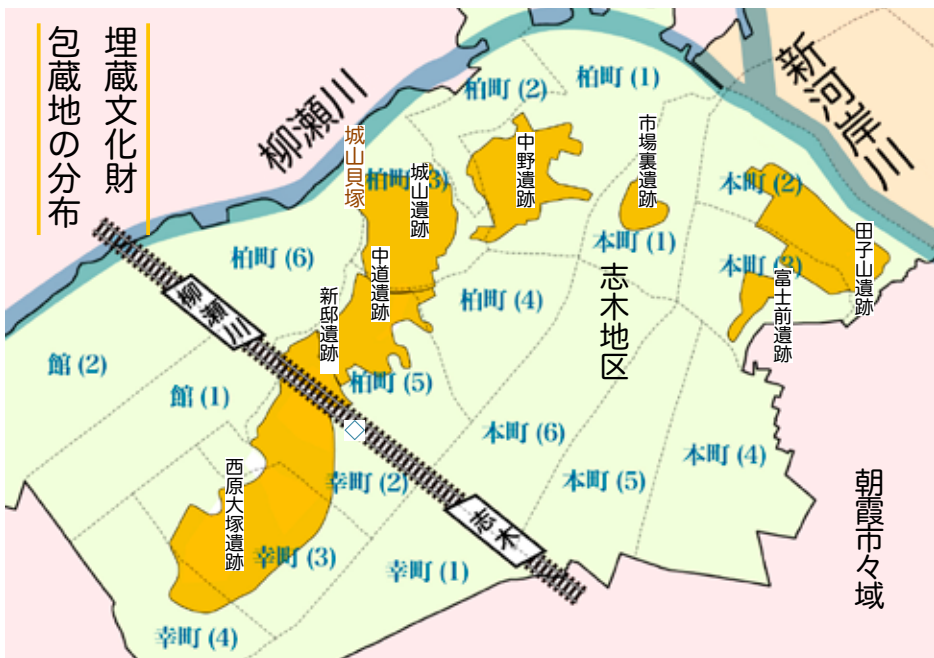
一・十 志木市内の埋蔵文化財の発掘が始まったのは・・・

昭和四十八年（1973）なので、すでに四十年

余り以前のことになる。当時、市内の遺跡として僅かに知られていた「西原大原」の発掘の実行だった。

志木市の関係者は意気込みに溢れ、「志木市郷土史研究会」の会員、「朝霞高校」の生徒などにも助力を要請して、予想を上回る成果を挙げた。小さい範囲（30mx15m）の発掘調査だったので、集落址の全貌を把握することは不可能だが、縄文中期、古墳時代前期の住居跡が六軒発見され、その成果は昭和五十年、「志木市の文化財第4集」として公開された。

遺憾乍ら、その後、発掘調査は中断して、再開されたのは十年後のことになる。昭和六十年（1985）に、『城山』で大規模な集合住宅が計画されたため、五千平米を越える地域で本格的な



発掘調査が実行された。文化庁に埋蔵文化財の発掘調査の届けを提出し、記録を保存するために「遺跡調査会」が編成された（成果は、「志木市遺跡調査会調査報告書第4集」として、1988年に公刊された）。

この調査のうち、発掘調査の件数と調査面積は一途に増加するようになり、平成期に入ると、年度内の遺跡調査件数は五十ヶ所、面積は貳万平米にも達し、しかも発掘調査は一層精密に行われるようになる。

一・十一 最新の西原大塚遺跡の調査から・・・

今までの調査で、旧石器～縄文時代から、弥生・古墳・奈良・平安時代を経て、中世・近世までの長い時代にわたる複合遺跡であることが判明していたが、特に、縄文時代中期の住居跡は百八十軒以上、また弥生時代後期から古墳時代の住居跡が五百軒以上見つかったり、それぞれの時代の拠点的な集落だったことは間違いあるまい。

平成二十三年（2011）に発掘調査された『西原大塚遺跡第174地点埋蔵文化財発掘調査報告書』から、詳細な調査記録を以下に例示することにしよう。

今回の調査では、縄文中期の住居跡十軒、弥生後期から古墳前期の住居跡四軒などが見付かった。特に、縄文時代の第174号住居跡からは、その構造、遺物出土状態や土層堆積状況とともに、住居の建替・拡張など、当時の人々の具体的な活動を知るための良好な資料が数多く得られている。

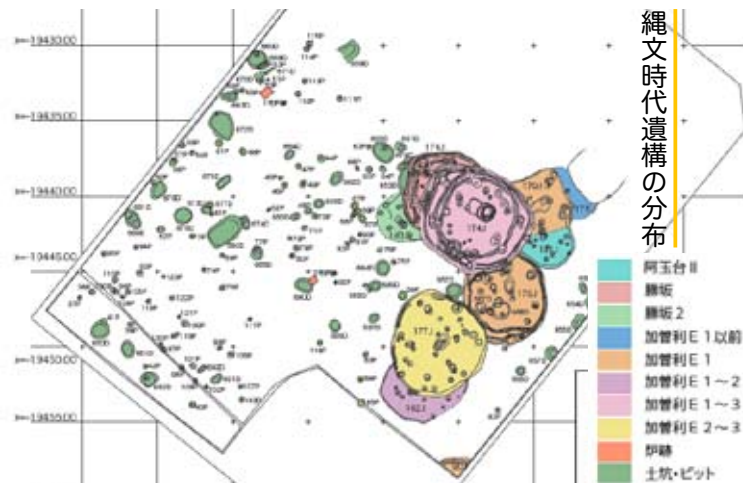
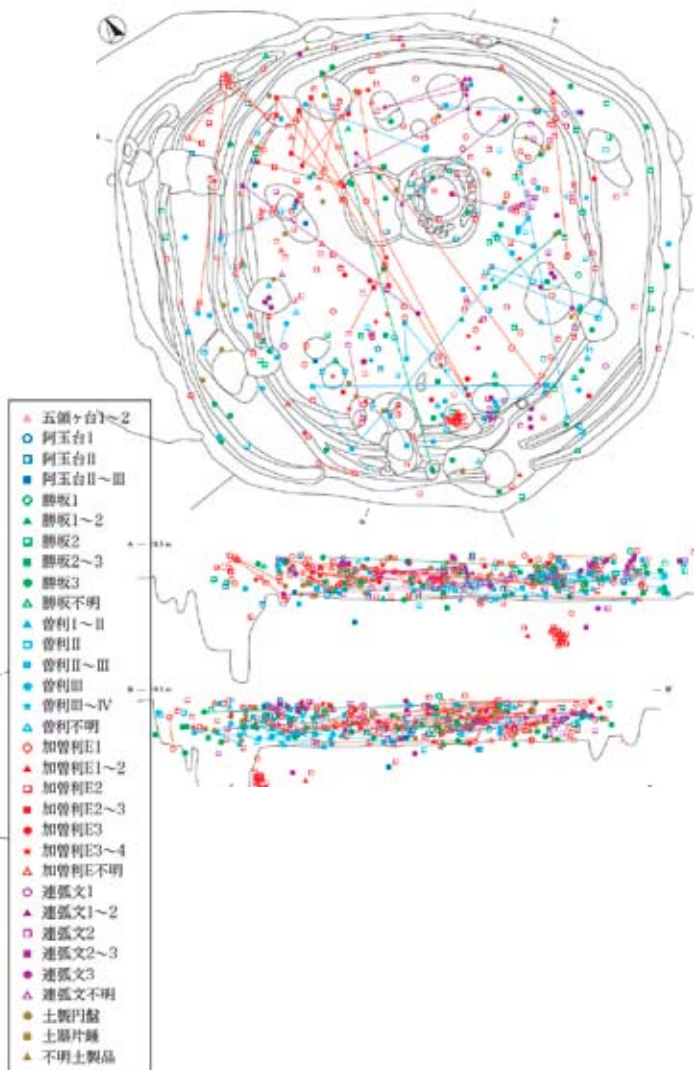
ただし調査地点の現況は畑地として利用されており、度重なる耕作痕（農作業で、幅が狭く、深く掘る「トレンチャー」の跡）によつて遺構は攪乱されていた。

しかも、縄文時代の遺構は、174号住居跡などでは、拡張された可能性が窺われた。

出土した位置の判明している土器・土製品は膨大な数にのぼり、実に5,903点と報告されている（うち五領ヶ台式1点、阿玉台式292点、勝坂式585点、曾利式263点、加曾利E式2,554点、連弧文306点、土製円盤14点、土器片錘10点、不明土製品2点、粘土塊2点）。なお、石器総点数は721点という。まさに驚異的な数字と言わざるを得ない。

次章では、弥生時代、古墳時代に移って、市内、及び近隣を中心とする遺跡の数々を訪ねることにしたい。

174号住居跡土器の出土図



上空からの写真



志木市埋蔵文化財センター
「縄文土器の展示コーナー」



装飾された華麗な土器



174号住居跡遺物の出土図

